

長らくご愛読有難うございました。

(前館長 伊藤郁太郎)

今年二月の初め、調査のため中国杭州を訪れた。杭州歴史博物館では春節の直前に当り、館内にさまざまな飾付けが施されていた。同館の吳曉力館長の発案で、市民参加による春節を祝う对聯の書を壁面いっぱいに貼り連ねている。私にも、参加せよという。経験がないからと何度も辞退したが、祝い事だから出来不出来は関係ない、館のPRのために是非、と押し切られた。どうさの事で、書くべき句も見当らない。良寛の書に「天上大風」とあったのを思い出し、春にちなんで「天上薰風」と改変して奮勇を振うこととした。汗の出る思いであった。しかし恵つく暇もなく、対句を迫られた。呻吟する私に周囲から助け舟が出て、句も「人間慈雨」と決まり、ようやくのこと、一世一代の揮毫は生まれた。

私は書が好きである。しかし、それは書の鑑賞に限る。自ら書くことには、畏れを感じて容易には踏み出せない。自分の心の内奥の隅々までが露顕するようで、怖いのである。一方、すぐれた書に接すると、心中で筆の運びをなぞることによって書き手と脈動を共にできる。書は人なり、の言葉の通り、書を通じて時空を超えた親密な交感が可能となるのである。

書についてほとんど知識はないが、自分なりの好みはある。昨年の冬、台北の故宮博物院で、北宋時代に於ける絞った書画版本古陶磁の夢のような展覧会が開催された。私は從来、北宋の書としては三筆のうち、黃庭堅の俊敏、米芾の織美にひかれていたが、蘇軾の「黃州寒食詩卷」に改めて接した結果、蘇軾の重厚さが実は一段とまさるのではないか、ということに初めて気づかされた。落魄した蘇軾が血を吐く想いで綴った絶唱を自ら書き認めていく情景を髣髴すると、思わず目の潤んでくるのを抑えることが出来なかつた。好みは経験の深まりによって移行するものである。

書についての黄口児（くちはしの黄色い青才）の弁をさらりと繰りひろげると、日本の書では空海、大燈国師、一休、浦上玉堂、良寛を選びたい。最近、玉堂の扁額「芳草四時春」に接し、掲げられた空間に文字通り、春色が満づる想いをした。近現代の書では志賀直哉、奥村土牛、高村光太郎が私にとっての三筆である。このほか村上華岳、熊谷守一、梅原龍三郎、萩原朔太郎など書家以外の芸術家の書に心惹かれることが多い。本来の作品との結びつきに想いが深まり、興味が増幅するからであろうか。或いは拙なるは巧に勝るの趣きが強いためであろうか。

（前館長 伊藤郁太郎）

展示室から

テーマ展「天にさげる器
—朝鮮時代の祭器—」

青花蓮池文角皿（表紙）



方形をなす形の祭器は、餅を供えるための台とされます。上面に描かれた蓮花や岸辺の花は、現実にはありえないほど拡大され、おごそかな祭器とは対照的に、明るく生命感にあふれた表現となっています。このように朝鮮末期になると、祭器にもしだいに華やかな文様がほどこされるようになりました。

粉青白地象嵌条文蓋（写真上）



朝鮮時代・15世紀後半～16世紀前半
h:16.2cm Acc.No.20219 (住友グループ寄贈)

蓋（は）と呼ばれる祭器の身を形作ったものです。もとの青銅器にある雷文を大きく拡大し、まるで現代絵画のように装飾しています。また形もどっしりと力強いものとなっています。こうした文様や形の大膽なデフォルメは、朝鮮時代の祭器の最大の特色といえます。（M.K.）

次回展示予定：

平成20年7月19日（土）～9月28日（日）
特別展「沖正一郎コレクション 鼻煙壺の美（仮称）」

編集後記

◆新しい友の会制度が、この4月から始まりました。皆様に喜んで頂けるような友の会になればと願っています。（S.S.)

ボランティアの窓

◆前号に登場した「兵庫県公館」、実は私も「神戸が誇るべき建築No.1」と思っています。残念ながら、設計者、山口半六の名は、神戸はおろか、生まれ故郷の松江でも知る人は

少ないでしょう。幕末に藩士の子として生まれ、幼い時からフランス語を学びパリに留学したのですから、並外れた才能と努力の人だったのだと思います。

公館が完成した日の朝刊には、そのスケッチが大きく一面を飾っています。彼は、西洋独特の柱の強調を嫌ったそうですが、松江の武家屋敷の横へ横へと伸びていく優美な屋根のラインが、この建築にも受け継がれているのではないでしょうか。

山口は、結核を患い、40代の若さで神戸の療養所で亡くなっています。その終焉の地を突き止めようと試みたのですが、今もって謎のまま…。「明治は遠く…」と言いますが、ほんの

展示のおしらせ

4月1日（火）～7月3日（木）

◆ テーマ展

「天にさげる器—朝鮮時代の祭器—」

◆ 特集展

「高田コレクション 古代イランの造形—土器と青銅器」

◆ 平常展

安宅コレクション中国・韓国陶磁、

李秉昌コレクション韓国陶磁、日本陶磁

◆ 休館日：月曜（5/5を除く）、4月30日（水）、5月7日（水）

友の会 通信

2008.4
No.85

ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA



青花蓮池文角皿
朝鮮時代・19世紀
w:25.4×19.1cm Acc.No.21437 (李秉昌氏寄贈)

特集展「高田コレクション 古代イランの
造形—土器と青銅器」

赤色磨研動物形注口土器（写真下）

紀元前1千年紀初

h:15.3cm Acc.No.42490

革袋を背負った驢馬のような動物をかたどった土器で、嘴形の口と中空に作った胴を持ち、液体を入れることが可能な構造です。鹿や瘤牛などをかたどったものも、知られています。このような土器が墳墓より数体並んで出土した例があることから、葬送儀礼に関わるものと考えられています。（K.N.）

お知らせ：

開館当初より25年間、当館館長を勤めてまいりました伊藤郁太郎が、この3月31日をもって退任しました。新館長には出川哲朗が就任し、学芸課長と兼任することとなりました。

長らくご愛読いただきました前館長による「美術館の舞台裏」に続く「風塵往来」も本号をもって終わらせていただきます。次号から出川新館長による新しいコラムを開始いたします。これからも友の会通信をご愛読くださいますよう、お願い申し上げます。

友の会事務局

僅かな時の流れに忘れ去られていくというのは残念でなりません。（M.T.）

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信 通巻第85号
2008年4月1日発行 No.24-1 (年4回)

編集・発行：大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン：清嶋滋+studioTWEN 印刷：岡村印刷工業株式会社



1 青瓷獸足洗 上虞尼姑塚三国西晋墓出土



2 青瓷坐俑 南京江寧区上坊三国吳墓出土
南京市博物館蔵



3 青瓷釉下彩双领罐 南京船板巷出土
南京市博物館蔵

「中国青瓷史話—魏晋南北朝を中心に—」

小林 仁

近年の相次ぐ考古発見により、中国の青瓷史研究は大きく進展しつつあります。中国では後漢時代の中晩期に成熟した青瓷が誕生したといわれ、それ以前の原初的な青瓷は「原始青瓷」と呼ばれています。この原始青瓷は商時代の中期（紀元前15世紀頃）に誕生したとされています。原始青瓷の誕生に関しては、南方発生説、北方発生説がありますが、近年各地で豊富な様相を見せることが明らかになりつつあり、原始青瓷の概念の見直しやその呼称自体に対しても再検討の必要性が指摘されています。とくに、祭器や礼器としてのその用途の問題は、後の宋代官窯青瓷の誕生を考える上でも重要な視点といえましょう。同様に、青瓷が大きく発展する三国時代から南朝にかけての、いわゆる六朝時代の江南地方一帯の青瓷についても近年新たな発見があり、注目されています。越窯の前身ともいえるこの時期の青瓷（「古越磁」は日本独自の呼称であり、学術用語としては妥当性に欠けるものです）は、後の越州に属する会稽上虞一帯の窯址群以外にも、江蘇省の宜興南山窯や浙江省の吳興德清窯、金華婺州窯、温州甌窯、さらには江西省の洪州窯などで主に生産されたことが分かっています。とくに、最近発掘された上虞尼姑塚三国西晋墓から大型で極めて質の高い青瓷が出土して話題になりました（Fig.1）。筆者も一昨年発掘現場を訪れ、出土した青瓷製品を実見しましたが、精緻な造形や装飾、さらに艶やかな灰青緑色の落ち着きのある釉色は、後の唐越窯の秘色青瓷への展開を感じさせるものでした。また、近年南京江寧区上坊で発見された三国・吳時代の大規模な墓から出土した青瓷俑の一群は、南京地区的六朝墓出土の青瓷俑としては最多であり、また青瓷としての質も高く、三国吳の青瓷製作の水準がかなり高いレベルに達していたことを示す貴重な資料といえます（Fig.2）。さらに注目すべきは、中国最古ともいわれる三国吳の鉄絵青瓷（中国では“釉下彩瓷”といいます）が、近年、南京市内の吳の宮殿内にあたる場所などで出土したことです（Fig.3）。伝統的な神仙思想に関するモチーフが器面にびっしりと描かれており、漆器工芸などからの影響とともに、奢侈を好んだ吳の宮廷が特別に焼成させた皇宮用製品である可能性も指摘されています。こうした江南六朝青瓷の多様性と質の高さは、後の越窯青瓷の前段階という単なる過渡期的なものというより、中国青瓷史における重要な時期の一つと言っても過言ではなく、今後その位置づけや意義は改めて見直されべきでしょう。

一方、同時期の北方、すなわち北朝の青瓷に関しても、窯址の発見や墓葬からの出土例など、従来の江南青瓷優勢だけではない状況が明らかになりました。北朝墓での出土例がいくつか知られる青瓷蓮花尊や天鷄壺などの製品は、南方での出土例もあることから、従来江南産説もありましたが、胎土や造形的な特徴などから北方産である可能性も高いといえます。これまでの出土例から、北魏以降、江南六朝青磁の隆盛の影響を受け、北方各地でも青瓷生産がはじまっていたものと考えられます。なかでも北魏宣武帝景陵（515年）出土の青瓷は、すでに北魏後期には北方青瓷がかなり高い水準にあったことを示すものです（Fig.4）。最近、河南鞏義白河窯からは早期の青瓷が発見され、北齊末にさかのぼるものもあるとされ注目されています。北朝では北齊時代から次第に白瓷への傾斜を強め、つづく隋時代に成熟した白瓷が誕生することになります。北齊末から隋唐にかけての北方青瓷の展開は、白瓷誕生の問題とも関連し、今後更なる発見と研究が期待される分野です。

「唐から明の中国の青磁に関する諸問題」

出川哲朗

唐時代から明時代の青磁について、未解決の問題や新知見などについて紹介します。

1 唐代鼎州窯の問題

陸羽（733?～804?）の「茶經」（760年頃）では「越窯」に次ぐ評価のある青磁窯として、鼎州窯の名前が見られますが、現在のところ、どのような製品であったのか、また窯址等も不明です。ただ、唐代の黃堡鎮窯が鼎州窯ではないかとする説もあります。唐代の黃堡鎮では晚唐に大量の青磁が焼成されているのが報告書などで知ることができます、果たして「茶經」が成立したころに、評価の高い青磁があったのかは分かりません。

唐代黃堡鎮窯では青磁だけではなく、三彩や黒釉、茶葉末釉なども盛んに焼成していました。

2 秘色青磁の焼造とその性格についての問題

唐代の秘色瓷の名称の由来の問題は諸説ありますが、はっきりしていません。唐代から五代にかけては秘色の名称は広く知られ、唐代の詩にはもちろん、日本の文献にもたびたび登場します。貢磁として、9～10世紀の越窯で焼成されていたようですが、法門寺（784年）出土の「瓷秘色」によって、その秘色青磁のレベルの高さが認識されるようになりました。晚唐の青磁の理想とする釉色が分かる出土品です。

3 五代柴窯と耀州窯の関係問題

五代耀州窯が柴窯ではないかとする説があります。柴窯は五代・後周の世宗柴榮の御窯であり、文献上は『五雜俎』に「雨天青雲破廻」、『清秘藏』『博物要覽』、『長物志』（明時代）などには「青如天、明如鏡、薄如紙、声如磬」、『格古要論』には「柴窯器出北地河南鄭州」などの記述がみられるものの、柴窯の製品、窯跡等は

不明です。

4 北宋官窯の問題

葉賛著『坦斎筆衡』に「政和（1111～1117）の間、都汴京に窯をひらき官窯」と命名したという記述があり、これが北宋官窯ということですが、その製品、窯址などは不明でした。しかし、近年、汝州市内にある張公巷窯が北宋官窯ではないかという説が出されています。

5 汝州張公巷窯と宝豊県汝窯との関係問題

河南省宝豊県清涼寺窯は1987年に発見され、「汝窯の発見」（河南省考古研究所、上海博物館）が刊行されました。正式の発掘報告書は2008年に出版が予定されています。2001年の汝窯シンポジウム（中国古陶磁学会）で河南省汝州市張公巷窯についての紹介があり、はじめて北宋官窯の可能性が示唆されました。これまで2000年、2001年、2004年に発掘調査がなされ、2004年には「張公巷窯、鞏義窯新発見シンポジウム」が開催されました。ここでは張公巷窯の出土品が研究者に紹介され、北宋官窯の可能性が高いとされました。汝州張公巷窯の活動年代や汝窯との関連、窯の性格などについては、不明な点も多く、今後の研究が期待されています。

6 伝世の哥窯の产地と生産年代の問題

伝世の哥窯についての研究は、ほとんどなされていません。現在窯址が不明ですが、杭州市老虎洞窯あたりという説もあります。宋代の五大名窯の一つとして著名ですが、生産年代については元時代という説もあります。

7 南宋老虎洞窯と修内司官窯の問題

南宋官窯の初期は余姚官窯（寺龍口窯、低嶺頭窯など）と呼ばれていますが、文献にある修内司内窯は、発掘された老虎洞窯（修内司の銘のある窯道具を2006年に発見）に当ると推定されています。老虎洞窯の焼成年代についても諸説あります。それに対して、文献にある郊壇下の新窯は烏龜山山麓にあり、現在、南宋官窯博物館となっています。出土品と伝世の南宋官窯製品との比較検討がなされているところですが、今後の研究の進展が期待されています。

8 宋代龍泉倣官窯の問題

龍泉窯の一つである溪口窯では、南宋時代に南宋官窯風の黒胎の青磁が焼成されました。浙江省博物館分館の陶片展示室で、溪口窯の黒胎青磁を見ることができます。この窯をめぐって、倣南宋官窯あるいは龍泉官窯ではないかとされていますが、正式の発掘がまだ行われていないので、その実態については不明です。

9 鈞州官窯制作年代の問題

官窯タイプの鈞窯に関して「鈞窯シンポジウム」（2005年河南省禹州市）、「鈞窯シンポジウム」（2006年11月広東省深圳市）などが相次いで開催され、研究が急速にすんでいます。その契機となったのが、2004年河南省禹州市内の製薬工場で官窯タイプの鈞窯が出土したことです。1974年に鈞台窯発掘で発見された「宣和元宝」の銭範模があり、これによって徽宗時代（1101～1125）とされていましたが、「中国古陶瓷標本　河南鈞台窯」（2003年嶺南出版）によって「宣和元宝」銭範の裏面に「崇寧年製」（1102～1106）の銘があることが示され、この銭範は疑問があり、年代の根拠とならなくなりました。

官窯とよばれるものは、高台裏に番号のあるもので、故宮博物院や東洋陶磁美術館などに収蔵されているタイプ（Fig.5）のものです。文献では『格古要論』（洪武21年1388曹昭）の「古窯器論」には宋代の陶磁器の記述がありますが、鈞窯の記述は見当たりません。明時代には鈞窯は宋代のものとは、認識されていなかったことになります。万暦年間から鈞窯の記述が増えています。『遵生八箋』（万暦19年1591）（高濂1573～1620）や『清秘藏』（万暦23年1595）において柴汝官哥定の次の評価として、鈞窯、龍泉窯などがあげられています。官窯タイプの鈞窯の制作年代については従来、大陸では北宋説が中心、海外の研究者は金代説、元代説を支持していましたが、最近になって、明代説が有力となってきた。2006年のシンポジウムでは官窯タイプの鈞窯は明初であるとの説が多く支持を受けるようになりました。

10 明代龍泉窯官窯の問題

龍泉窯は1988年に國務院が全国重点文物保護単位に指定しました。2006年9月から2007年1月に浙江省龍泉市小梅鎮大窯村にある大窯楓洞岩窯の発掘を北京大学、浙江省文物考古研究所、龍泉青磁博物館が共同で行いました。発掘面積1600平方メートルです。これまでに、1960年代から朱伯謙氏が大窯、金村、溪口などを発掘調査、1979年にはダム工事にともなう発掘調査が行われ、安福、安仁など元から明代の窯が発掘されています。

今回の大窯楓洞岩での発掘成果として、永樂19年（1421）の銘のある陶范が発見され、永樂期には龍泉窯で宮廷用に生産がなされた可能性が考えられるようになりました。また、明代地層から大量の優れた磁器が出土し、明代初期は龍泉窯の衰退期ではなく、優れた製品が焼成された活動期が続いていた事が分りました。東洋陶磁美術館蔵の梅瓶（Fig.6）も明初のものと思われます。



4 青瓷天鷄壺 北魏宣武帝景陵（515）出土



5 紫紅釉盆 鈞窯 明時代・15世紀
(Acc.No.10567)



6 青磁 梅瓶 龍泉窯 明時代・15世紀
(Acc.No.10870)